様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７８０３８７

研究課題名（和文）パーソナリティ特性の発達と健康の変化を統合的に理解するための縦断調査研究

研究課題名（英文）Longitudinal study for understanding links between changes in personality traits and changes in health

研究代表者
高橋　雄介（Takahashi, Yusuke）

京都大学・教育学研究科（研究院）・准教授

研究者番号：２０６１５４７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，パーソナリティ特性の発達や変化は，身体的・精神的な健康状態の変化とどのような関連があるのかという問題意識のもと，縦断調査データを用いた統計解析により，パーソナリティ特性と健康の両者の相互的な関連性について統合的な理解を促進することを主な目的とした。
本研究の結果，パーソナリティ特性は後の健康に対してそれぞれ特異的な影響を与えることを明らかにし，また，個人差の発達の様相を類型化したのちにそれらが幼少期の養育態度によってどのように説明されるのかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The main purpose of this study was to have a better understanding of relationships between human personality traits and health using longitudinal data. The author revealed that hyperactive trait anxiety functions as a predictor for general distress for anxiety and depressive symptoms, and that hypoactive trait impulsivity functions as a unique predictor for depressive symptoms. Next, the author found heterogeneity in developmental profiles of prosocial personality (i.e., social skills) during the preschool ages, and identified parenting practices that contributed to different patterns of social skills development. Lastly, the author reviewed the studies on individual differences including research on personality traits, discuss the current trends and challenges on this research area, and suggest future perspectives and further developments on personality and individual differences research.

研究分野：教育心理学

キーワード：パーソナリティ特性　個人差　身体的健康　社会的健康　精神的健康　縦断調査　予測的妥当性　混合軌跡モデリング

１．研究開始当初の背景

急速な勢いで進行する現代の超高齢化社会において，身体的・精神的・社会的な健康を維持し，そして増進させるための個人的な要因として，何が必要とされるだろうか。近年，パーソナリティ特性は，問題行動や精神病理的な症状をはじめとする心理学的な変数以外にも，寿命や身体的な健康などの社会疫学的な変数に対しても有意な予測力を持つことが示されている(Heckman et al., 2006; Robert et al., 2007; 高橋他, 2011)。

2000 年のノーベル経済学賞受賞者でもある James Heckman は，認知能力(cognitive abilities)と比較するために，パーソナリティ特性のことを non-cognitive abilities と呼び，経済･労働市場においても，この non-cognitive abilities が認知能力よりも予測的であり，かつ教育などで介入が可能であることをレビューしている。同様に，Roberts et al. (2007) は，死亡率に対して影響を与える可能性のある変数として，パーソナリティ特性・社会経済的地位・認知能力の三者のうちどれが最も強い予測力を示すかメタ分析を行い，高い予測的妥当性を示したのはパーソナリティ特性であることを示した。また，高橋他(2011) は，パーソナリティ特性に関する最近の研究の展開を概観し，パーソナリティ特性は可塑的で変容可能性が十分にあることについてまとめ，教育などによる予防的介入について示唆している。よって，予測力と変容可能性の高い変数としてのパーソナリティ特性という視座を踏まえた調査研究は今後当然必要になる。

本研究のように，年齢横断的な身体的・精神的・社会的健康の増進のための健康科学の進歩に向けた実証的・系統的研究は，国際的に見ても，数えるほどしか例が無い。少子高齢化社会が急速に進む現代において，本研究は，子どもからお年寄りまで幅広い年齢層のための実証的健康科学に貢献する基礎研究の先駆けを成すものとして大きな学術的意義を持つ。また，本研究の結果は，不健康な状態の発生を未然に防ぐための予防策や発生と維持のプロセスを変化させるための方策に対して示唆を与える点において学術的に有意義であると同時に，健康の問題が，自然科学分野だけではなく，社会科学分野でも大きな問題として扱われるようになった昨今において，社会的な要請にも適切に対応した実証的な情報を与えることのできる本研究の成果は社会的にインパクトを持つと言える。

２．研究の目的

申請者は，これまで「パーソナリティ特性の発達や変化は，身体的な健康状態の変化とどのような関連があるのか」という問題意識のもと，主には 2 時点における縦断調査研究を行ってきた。しかし，変化を検証する際に，2 時点の調査データを用いる場合，直線的な変化しか考慮できないなどいくつかの大きな欠点がある。曲線的な変化なども考慮に入れたうえで，両者の発達と変化について検討を行い，相互の関連性の全体像をより詳細に把握するためには，継続的な知見の蓄積が必要である。そこで，本研究計画では，3 時点以上の縦断調査データを用いた高度な統計解析により，両者の相互関連についての統合的な理解を促進することを主な目的とした。

３．研究の方法

本研究における主な手法は質問紙調査であった。結果の適切な一般化を試みるため，年齢横断的で大規模なサンプルに対してオンライン・郵送・対面式で調査を実施した。質問項目の構成は，パーソナリティ特性・身体的な健康･精神的な健康(抑うつ症状や不安症状)，社会的な健康(主観的幸福感や人生満足度)などである。上記の尺度項目以外では，年齢・性別・学歴・収入など健康に関連すると考えられる共変量をたずねた。

４．研究成果

平成 25 年度の研究の成果として，2 つのパーソナリティ特性(特性的な不安 BIS と特性的な衝動性 BAS)はそれぞれ不安症状と抑うつ症状に対して特異的な影響を与えていることを明らかにした。不安と抑うつは非常に相関の高い症状ではあるが，パーソナリティ特性の個人差の観点からこれら 2 つを弁別可能であることを明らかにした。具体的には，BIS の高さは不安と抑うつの併存に対して寄与しているのに対して，BAS の低さは抑うつ症状に対してのみ寄与していた。この研究成果は，Psychologia: An International Journal of Psychological Science に採録された。

次に，平成 26 年度の研究として，日本国内において実施された全国規模の縦断調査データを用いて，就学前児の向社会性(社会的スキル)の発達軌跡を明らかにすることを目的として行われた。具体的には，混合軌跡モデリングを用いて 2-5 歳の就学前児の社会的スキルの縦断的な発達軌跡を描き出し，2 歳時点の養育態度がそれらの発達軌跡を予測するのかどのように検討を行った。その結果，社会的スキルの下位次元はすべてそれぞれ低群・中群・高群の 3 群の発達軌跡を描くことが確認された。また，多項ロジスティック回帰分析の結果，協調と自己表現は認知的・情緒的な関与を行うことによって，自己抑制は社会的な刺激を与えることによって，自己表現は統制や罰を回避することによってより高群に所属しやすいことが明らかとなった。育児に対する社会的なサポートの多少はこの時期の社会的スキルの発達には影響を与えていなかった。本研究は，就学前児の社

会的スキルの発達は一様ではなく複数のグループに分かれ，2 歳時点の親の養育態度は社会的スキルの発達軌跡に対して領域特異的に寄与する可能性を示唆するものである。この研究成果は PLOS ONE に採録された。

最後に，平成 27 年度の研究としては，次なる研究のステップを射程にとらえるために，パーソナリティ特性を含む個人差研究の概観を把握し，今後の展望を行うために，総説論文を執筆し，これらの成果は心理学評論・教育心理学年報に採録された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6　件）

1. 高橋雄介. (印刷中). パーソナリティ特性研究をはじめとする個人差研究の動向と今後の展望・課題. 教育心理学年報.
2. De Fruyt, F., Moriya, J., & Takahashi, Y. (2015). Current status and challenges in assessing the personality trait spectrum in youth. *Japanese Journal of Personality*, *25*, 119-130. DOI: 10.2132/personality.23.119
3. 高橋雄介・野村理朗. (2015). 実行機能の遺伝的基盤－人間行動遺伝学研究と遺伝子多型研究の知見から－, 心理学評論, *58*, 160-174.
4. 高橋雄介. (2015). 時間を含むデータをどう分析するか?－人の変化・発達をとらえる統計. 子ども発達臨床研究，*7*，63-92.
5. Takahashi, Y., Roberts, B. W., Yamagata, S., & Kijima, N. (2015). Personality traits show differential relations with anxiety and depression in a nonclinical sample. *Psychologia: An International Journal of Psychological Sciences*, *58*, 15-26. DOI: 10.2117/psysoc.2015.15
6. Takahashi, Y., Okada, K., Hoshino, T. & Anme, T. (2015). Developmental trajectories of social skills during early childhood and links to parenting practices in a Japanese sample. *PLOS ONE*, *10(8)*: e0135357. DOI: 10.1371/journal.pone.0135357

〔学会発表〕（計　30　件）

1. Takahashi, Y., & De Fruyt, F. (2016). Personality correlates of adjustment to school life and quality of life among Japanese early adolescents, 17th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology: Lifespan Social-Personality Preconference, January, 28-30, 2016.
2. Takahashi, Y., & Hoshino, T. (2015). Mean-level change in behavioral inhibition system and behavioral activation system: Can temperamental traits be changed? 17th European Conference on Developmental Psychology, Braga, Portugal. September, 8-12, 2015.
3. 高橋雄介. (2015). 「心理学における調査研究(2)」日本行動計量学会第 43 回大会チュートリアルセミナー「著者が解説する『R による心理学研究法入門』」 首都大学東京，2015 年 9 月 1-4 日.
4. 高橋雄介. (2015). 3 つの気質次元に関する横断データを用いた擬似的な発達軌跡の検討, 日本教育心理学会第 57 回大会，新潟大学，2015 年 8 月 26-28 日.
5. Takahashi, Y., Yamagata, S., & Ando, J. (2015). Genetic and environmental influences on self-control, grit, and conscientiousness: Results from Japanese adolescent twins. 45th Annual Meeting of the Behavior Genetics Association, San Diego, USA. June 17-20, 2015.
6. 高橋雄介. (2015). チュートリアルセミナー: 発達のアウトカムに関する縦断研究, 日本発達心理学会第 26 回大会, 2015 年 3 月 20-22 日.
7. 高橋雄介. (2015). がまんの行動遺伝学. 日本パーソナリティ心理学会経常的研究交流委員会企画シンポジウム, 2015 年 3 月 15 日. 東洋大学.
8. 市村賢士郎・伊川美保・河村悠太・Arseny Tolmachev・長見祐暉・高橋雄介・楠見孝. (2015). 「ラーニングコモンズにおける学習環境をデザインする」大学教育フォーラム, 京都大学, 2015 年 3 月 13-14 日.
9. Takahashi, Y. (2015). Testing the compensatory effect: Changes in conscientiousness and health in married couples. 16th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology: Lifespan Social-Personality Preconference, January, 26-28, 2015.
10. Hatano, K., & Takahashi, Y. (2015). Which came first, the personality trait or the identity process? 16th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology: Lifespan Social-Personality Preconference, January, 26-28, 2015.
11. 高橋雄介. (2014). 討論: パーソナリティ特性の形成要因－家庭・学校・職場の経験から－, 行動経済学会第 8 回大会，慶應義塾大学，2014 年 12 月 6-7 日.
12. 高橋雄介. (2014).「時間を含むデータをどう分析するか?－人の変化・発達をとらえる統計」北海道大学子ども発達臨床研究センター主催実践統計法セミナー. 2014 年 10 月 11 日. 北海道大学.
13. 畑野快，高橋雄介. (2014). パーソナリテ

ィとアイデンティティの因果の方向性―交差遅延効果モデルによる検討―，日本パーソナリティ心理学会第23回大会，山梨大学，2014年10月4〜5日.

14. 高橋雄介. (2014). 項目反応理論を用いた BIS/BAS 尺度日本語版の心理測定学的特徴の確認.日本心理学会第78回大会，同志社大学，2014年9月10-12日.
15. Hatano, K., Takahashi, Y., & Sugimura, K. (2014). Is three-dimensional model of identity development useful for Japanese adolescents? 14th Biennial Conference of the European Association for Research on Adolescence, Cesme, Turkey, September 3-6, 2014.
16. 高橋雄介. (2014). 「思春期における自己制御の発達と学校・社会適応との関連に関する行動遺伝学的研究」 第2回 思考と行動判断の双生児研究，慶應義塾大学「思考と行動判断」研究拠点. 2014年8月1日. 慶應義塾大学.
17. Takahashi, Y., Hoshino, T., & Roberts, B. W. (2014). Cross-cultural age difference in personality traits: Evidence from the US and Japan. 17th European Conference on Personality, Lausanne, Switzerland, July 15-19, 2014. [ECP Poster Award (2nd Prize)]
18. Hatano, K., Takahashi, Y., & Sugimura, K. (2014). Identity formation among early, middle, and late adolescents in Japan. 17th European Conference on Personality, Lausanne, Switzerland, July 15-19, 2014.
19. 高橋雄介. (2014). ふたごの育児を行う母親の抑うつの発達軌跡. 自主シンポジウム「ふたご研究のこれまでとこれから―『首都圏ふたごプロジェクト』の10年の縦断調査から見えてきたこと」，日本発達心理学会第25回大会，京都大学，2014年3月21〜23日.
20. 高橋雄介・畑野快. (2014). 青年期の Big Five パーソナリティ特性と問題行動傾向の関連. 日本発達心理学会第25回大会，京都大学，2014年3月21〜23日.
21. 畑野快・杉村和美・高橋雄介・溝上慎一 (2014). Utrecht-Management of Identity Commitments Scale を用いたアイデンティティ・ステイタスの発達的変化の検討―青年期前期・中期・後期の青年を対象とした横断調査から―，日本発達心理学会第25回大会，京都大学，2014年3月21〜23日.
22. Tanaka, M., & Takahashi, Y. (2014). Longitudinal correlated changes in parental relationship and depression among Japanese adolescents. 15th Society for Research on Adolescence Biennial Meeting, Texas, USA, March 20 - 22, 2014.
23. 高橋雄介. (2013).「パーソナリティ特性研究の高等教育研究への展開」 名古屋大学高等教育研究センター第119回招聘セミナー. 2013年11月15日. 名古屋大学.
24. 高橋雄介. (2013). 「社会科学・健康科学における行動遺伝学研究の位置付け」新学術領域研究「現代社会の階層化の機構理解と格差の制御：社会科学と健康科学の融合」第4回定例研究交流会シンポジウム. 2013年10月26日. 東京大学.
25. 高橋雄介. (2013). 発達や変化の軌跡をモデリングする. 委員会企画シンポジウム「パーソナリティ心理学における統計分析の動向」，日本パーソナリティ心理学会第22回大会，江戸川大学，2013年10月12〜13日.
26. 高橋雄介・宮崎慧. (2013). パーソナリティ特性と抑うつの関連に関する潜在クラス分析. 日本心理学会第77回大会，北海道医療大学，2013年9月19〜21日.
27. 畑野快・高橋雄介・溝上慎一. (2013). 自己効力感の変化が自己調整学習方略の変化に与える影響―潜在差得点モデルを用いた検討. 日本教育心理学会第55回大会，法政大学，2013年8月17〜19日.
28. Takahashi, Y. & Brent W. Roberts (2013). Mean-level changes in big five personality traits: Evidence from Japan. 121st APA Annual Convention, Honolulu, USA, July 31 - August 4, 2013.
29. Ando, J., Shikishima, C., Kijima, N., Yoshimura, K., Yamagata, S., & Takahashi, Y. (2013). Long-term genetic effects of working memory on cognition and personality in adolescence and adulthood: A 14-year longitudinal study of twins. 43rd Annual Meeting of the Behavior Genetics Association, Marseille, France, June 28 - July 2, 2013.
30. 高橋雄介. (2013). 「パーソナリティと精神的健康の発達行動遺伝学」 第1回 思考と行動判断の双生児研究，慶應義塾大学「思考と行動判断」研究拠点. 2013年5月19日. 慶應義塾大学.

〔図書〕（計 13 件）

1. 高橋雄介. (2016). 教育測定と教育評価. 子安増生・楠見孝・齊藤智・野村理朗・編，教育認知心理学の展望，第15章(pp. 223 - 236)，ナカニシヤ出版.
2. 高橋雄介. (2015). 性格によって社会生活は変わりますか? 兵藤宗吉・野内類・編，Q&A 心理学入門―生活の疑問に答え，社会に役立つ心理学，第1章 Q8 (pp. 92 - 106)，ナカニシヤ出版.
3. 高橋雄介. (2015). 心理学における調査研究. 山田剛史・編，R による心理学研究法入門 第8章(pp. 172 - 199)，北大路書房.
4. 高橋雄介. (2014). 離散時間ハザードの

ための統計モデルに向けて．菅原ますみ・監訳，縦断データの分析 II―イベント生起のモデリング (第 11 章第 1 節, pp. 354-366)，朝倉書店.
5. 高橋雄介. (2014). 母集団離散時間ハザード・モデルの正式な表現．菅原ますみ・監訳，縦断データの分析 II―イベント生起のモデリング (第 11 章第 2 節, pp. 366-376)，朝倉書店.
6. 高橋雄介. (2014). コックス回帰モデルをデータにあてはめる．菅原ますみ・監訳，縦断データの分析 II―イベント生起のモデリング (第 14 章第 2 節，pp. 515-522)，朝倉書店.
7. 高橋雄介. (2014). コックス回帰モデルをデータにあてはめた結果を解釈する．菅原ますみ・監訳，縦断データの分析 II―イベント生起のモデリング (第 14 章第 3 節，pp. 522-534)，朝倉書店.
8. 高橋雄介. (2014). きょうだい関係. 子安増生・二宮 克美・青年期発達百科事典編集委員会 (監訳・編集)，青年期発達百科事典(第 2 巻: 人間・社会・文化，pp.134-144)，丸善出版.
9. 高橋雄介. (2014). 調査法. 誠信 心理学辞典 (研究法: 02-03，pp. 37-39)，誠信書房.
10. 高橋雄介. (2014). 精神疾患と発達障害の遺伝. 誠信 心理学辞典 (遺伝: 24-06, pp. 787-790)，誠信書房.
11. 高橋雄介・安藤寿康. (2015). 気質の生物学. 日本発達心理学会・編，発達心理学ハンドブック第 8 巻「脳の発達科学」，第 22 章(pp. 219- 227)，新曜社.
12. 高橋雄介. (2013). ふたご研究のゆくえ. 日本発達心理学会・編，発達心理学事典, 第 12 章(pp. 278-279), 丸善出版.
13. 高橋雄介. (2013). 気質とパーソナリティ. 日本パーソナリティ心理学会・企画，パーソナリティ心理学ハンドブック, 第 3 章第 2 節(pp.78-84), 福村出版.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織

(1) 研究代表者
高橋　雄介（TAKAHASHI, Yusuke）
京都大学・大学院教育学研究科・特定准教授
研究者番号： 20615471

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし